

平成28年

人間福祉学部大熊ゼミ＋産業研究所

倉敷児島まちづくりプロジェクト参加学生
報告書



関西学院大学 産業研究所

■倉敷児島まちづくりプロジェクトの概要・目的：

「ジーンズの聖地」として、レトロな雰囲気のあるジーンズストリートを繁栄させるための、『人と人、人と商店街を繋ぐアートプロジェクト』。地域・商店街活性化の課題である、①地域・商店街ブランドを確立すること、②集客イベントを行うことを目的に、倉敷市児島の地域資源である繊維産業・ジーンズストリートを使用した学生と地域による新しい取り組みにより、地域と学生が連携し、新しい地域的话题を作る。

①「ひ・み・つ」&「地域活性化情報誌」編集

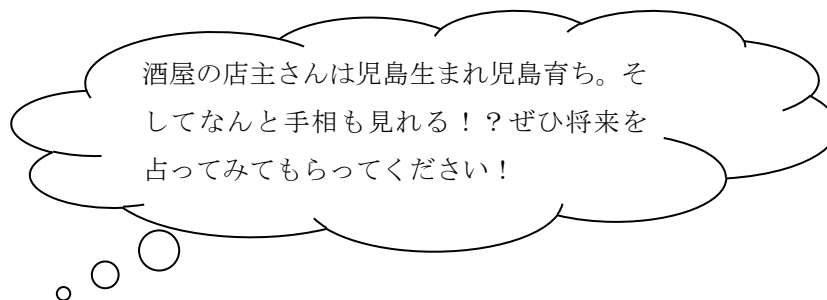
事前説明会： 4月14日（木）18:30 ～ 西宮上ヶ原キャンパスで実施

フィールドワーク： 4月16日（土）・4月17日（日）

「ひ・み・つ」とは…

各店舗にインタビューをしてその店舗の売りにしていることや、その店舗ならではの話、ここだけの話、など一歩足を踏みいれたいくなるような紹介文を掲示。「うわさ」の紹介文を店先に貼ることで、お店の宣伝になる。店主同士の距離も近づくことで、一体感が生まれ地域活性化がより進む。

例)



「地域活性化情報誌」

児島を訪れる観光客が見て分かりやすい、児島のまちのガイドマップを作成。観光客の増員を目的とし、お洒落なジーンズショップが立ち並ぶジーンズストリートを始め、日本で唯一のジーンズ資料館やジーンズ作りを体験できる工場、日本の夕陽百選に選定されており、瀬戸内海国立公園の代表的な景勝地である鷺羽山や、観光客向けへの手に取って歩きながら見られるようなガイドマップ作成。

②「第5回せんいのまち児島フェスティバル」での出店

事前説明会： 4月21日（木）18:30～ 西宮上ヶ原キャンパスで実施

フィールドワーク： 4月23日（土）・4月24日（日）

JR児島駅前周辺から児島駅前商店街、味野商店街及び野崎家住宅に至るまでの一帯を3エリアに分け、市民参加型のまつりとして開催される、「第5回せんいのまち児島フェスティバル」にて、デニム&畳縁バッグの販売。

■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・倉敷児島まちづくりプロジェクトの「ひ・み・つ」アート企画&「地域活性化情報誌」編集に参加したことで、まちづくりなど普段学べないことの体験ができました。文学部での学びの中では、ビジネス的な視点を養う授業はないため、良い機会でした。同じ年代の人間福祉学部の学生が自ら企画して、倉敷に行ってジーンズストリートを活性化させる実践的な活動をしているとは知らなかったのも、色々と刺激を受けました。ラミネートのデザインや質問内容なども工夫されており勉強になりました。また、ジーンズストリートは、国産ジーンズ発祥の地であり、商工会議所と商店街の人の考えの違いなどもあるようですが、是非発信していくべきところだと思いました。

他学部履修で座学を学ぶだけでは経験できなかったことがプロジェクトを通して学ぶことができました。また機会があれば、このようなプロジェクトに参加してみたいです。

- ・このプロジェクトを通して最も大きく学んだことは、人々を惹きつけることの難しさです。開催されていた児島フェスティバルで最も栄えているところに比べて人通りが少ないところでの販売活動であったこと、デニムバックの値段がお客さんの希望している価格より高めであったこともありました。一方で、デザインに関しては、結構受けが良く、予想よりも多くの人に興味を持っていただきました。何か企画をするにあたり、対象となる人々の需要を考えることの大切さ、より魅力的な売り方を考案する必要があるということ学びました。
- ・このプロジェクトで一番学べたことは、まちづくりがいかに難しいかということである。今回の活動は、各店舗にインタビューを行い、店舗や店主の秘密を聞き出し、店に張り出すことで、集客を狙うといったものであった。まちを巻き込んで行う企画であったが、一体感が得られず、インパクトに少し欠ける部分もあったように感じる。一体感を得るために、なにか新しい企画を考えていく必要があると思った。
- ・路上販売の難しさを実感した。『売り込み方』ひとつにしても、要所を押さえた簡潔な語り口でなければ相手に魅力は伝わらないということ学べた。
- ・ジーンズストリート全体としては「ひ・み・つ」アート企画にご協力いただけることになっていても、個々の店舗に実際に行ってみると企画に対して消極的ということも珍しくはなかったように感じます。このようなことは、せんいのまち児島フェスティバルやその他の地域活性化行事にも通ずるところがあるのではないかと考えました。そのような温度差は製品に対してのこだわりや、オーナーさんがそれぞれにもっている考えによるところが大きいように感じましたし、地域への愛着や、良いものを消費者に届けたいという気持ちは地域を元気にしようというモチベーションにもなりうるのだと学びまし

た。また、今回の企画ではこの次はどうでしょうか、もしこう聞かれたらどのように答えるのがよいのかと、常に見通しをもって行動することの重要性を再確認することができました。

■今後の学生活動について（活かしたいこと、課題）

- ・今後の学生生活では将来、社会人として働くためのスキルを養いたいと思います。今回のプロジェクトの中では商店街の方にインタビューがありましたが、事前知識の不足であまり関われませんでした。しかし、インタビューで人間福祉学部の学生と行動した時の名刺のやりとりやマナーなどを見ていて中では学ぶことが多く、自分もそういった事を身につけておくべきだと感じました。話を聞くと、3回生でもインターンに参加している学生が多く、また4回生の人から就活について聞いたことも参考になりました。今後、ビジネスマナーを身に付けたいです。
- ・私自身の地元と今回の児島は、地域活性化が必要だという点が共通しています。また、多くの日本の地域ではシャッター街などが目立つところが多く、それらの問題解決が地域の課題となっていることが多いです。一方で残念ながら現実では、地域活性化に取り組みつつも、なかなかその成果が出ていないということが多く見られます。今回、地域活性化プロジェクトに参加して、改めて自分の身をもって地域活性化の難しさを思い知りました。今後自分のゼミの研究で地域活性化に取り組む際には、地域活性化に成功している例をよく分析し、確実に成果の得ることができるような案を考えていきたいと思っています。
- ・今回のプロジェクトでは、交渉をする力が身についたのではないかと思う。また、相手の話をしっかり聞き、話を深めていくインタビュー力も身についたと感じる。このような経験を通して、大学生活で、相手の話を傾聴し、話を深めていけるようにしていきたい。
- ・地域へ赴くこと、足を伸ばし現地の人の声に耳を傾けることで、二次元的なイメージが立体的になる実感が得られた。つまりは偏見やレッテルを『確かめ』に行くことは重要であり、そこに何かしらの効果や波及を目指せるのであればなお良い。今後も大学が率先して、この運動がより広がることを期待したい。課題としては、他者へのはたらきかけや関わり方をどうすればいいのか、自分なりの軸を持つことを今後考えて生きたいと思う。
- ・地域活性化を図るには、地域住民がその地域を好きでいるだけでは少し足りておらず、他の地域と差別化できるような+αを持つ必要があります。私が暮らす地域ではどんな

ものが挙げられるのか考えてみようと思いました。今回のプロジェクトは、私にとっては社会人の方々にご協力いただき企画を進めていく初めての機会でしたので、とても緊張しましたが良い経験になりました。失礼のないようマナーに気を付けることは勿論大切ですが、やはり親しみやすい表情をつくることは円滑なコミュニケーションの鍵だと感じたので、インターンシップなどで実行していきたいと思います。また、常に先のことを考えて行動することは必要ですが、今の私はあまり見通しを持っていないように思いますので、日ごろから先々に何が起こりうるだろうかを意識して考えるようにしようと思っております。